

桃井かおり

JOSHIBI no.170





直感とオリジナリティは、 ものづくりが育んでくれる。

単なるベテラン女優と思うなかれ。映画監督をはじめ各方面に手を広げてきた桃井かおり客員教授の本質は、感覚がシャープな生粋のアーティスト。「型」にハマり、自らが飽きてしまうことを拒絶するあり方に迫る。

Photo 井上佐由紀 Text 立古和智

私 は役者だから、本当はただ芝居をしていればいいんだけど、映画監督や雑誌編集、商品開発といういろんなことをやりたがる(笑)。創作するって仕事は、自分に飽きてしまったらおしまいですから「どうやってたら自分が面白くられるか」が常にあるのです。振り返ってみると、幼い頃の私は、小児病棟にいました。10代のときは、バレエ留学で外国人として一人ぼっちの時間があったし、帰国してからは女子美術で絵を描くことを覚えました。一人でいた時間が多いから群れないクセがついてるんです。群れないと人に合わせる必要がない。すると「自分は何をしたいのか」「自分は何が好きなのか」といった、私のオリジナルな正義と美意識がすべてになってくる。知識じゃなくて体が決めていくというか、自分のオリジナルの感性が高まるとチャンスに気づく(笑)。直感的に進むべき道がわかる



3.11 A Sense of Home Films

3月11日に発生した東日本大震災を受けて映画作家 河瀬直美さんの呼びかけにより世界中から集められた20名が、「A Sense of Home」をテーマに、3分11秒の短編映像を制作。20作品は、9月11日に世界遺産を有する奈良吉野の金峯山寺で上映される。桃井かおり客員教授も監督として作品を発表

「ものを創る際の正しい方向に向かっていく」といった風でした。今年、還暦を迎えて、また急に男気が出てきたんです。これまでになく、なんか攻撃的に生きたくなくなっているというか。先日、原田芳雄が亡くなったときには「あんなに生命力の強い人ですら亡くなるなら、私もいつか死ぬ」と心底感じました。松田優作が亡くなったときは「代わりに長生きしてやる」と活気づいたものですが、芳雄の死は「余計なことに時間を費やさず、大切な時間を思い切り生きろ」と教えてくれました。シンプルにやりたいことだけをやって、会いたい人にだけ会う。今は、これからの人生を、そんな風に生きていきたいと思っています。



んです。私の場合、選んでいるというより、機会が転がり込んで来る感じ。だから、もっともっと動物みたいに勘を研ぎすましたい。

そういえば、先日の大地震のときに動物たちはその予兆をキャッチしたけど、私たち現代人は、何も気づかず大打撃を受けました。なんか世の中にある知識とか、便利なものに頼りすぎていた気がしました。もっと原始的な感覚を取り戻した方がいい。あの震災でそう痛感しました。そういった直感のようなものは、歳を重ねながら、いろんな経験を重ねることで磨かれます。それは歳を重ねていく良さでもある。人生って、つまりは「自分」って作品だから、他人に判断を委ねてばかりはいられない。その点、女子美生は創造が日常だから、

確実に感覚は磨かれていく。絵を描く、デザインをする。そういった行為では、どの色を使う、どのモチーフがいい、どこに配置する、といった瞬間的な判断を、数え切れないくらい繰り返すわけですから。それに自分のオリジナリティを、作品制作を通じてしか見つけられないともいえる。生き物らしく、前進しながら形にして崩してみてもの繰り返しで、また次に進む。ちよつと無理をしながら進化していく。そんな過程をなくして、オリジナリティには辿り着けないのです。今撮ってる作品では、カメラを回すのも、その前で演じるのも全部一人でやってるんだけど、映画こそ生き物にしか創れないもの。私は、現場で話しあいながら撮ってきた映画人でも最後の世代ですが、私自身は人に説明して動いて

もらうのって、なんだか時間が惜しい感じがしていました。一人で映画を創るのは無謀だけど実験してみる価値はある。芸術なんだから「安全」な型に収まるものではなく、もつとやわらかくて個人的なものでいいんです。やっぱり、なるべくチャレンジングな場所に身を置きたい。ちなみに来年私が出演するのはメキシコ映画(笑)。言葉を奪われて芝居に挑みます。少し前に、ロスの映画関係者と集って、私の監督作品「無花果の顔」をみんなで見ましたが、言葉に関係なくわかるものはわかるんだと思った。これは日本の映画人には評価されないのに、海外の映画祭では評価された作品です。友人たちからの言葉も「よくある型に当てはまらない」「僕らの予想を裏切る」

被災地の明日に向けて、女子美からのアクション。

今年3月11日を境に、次々に持ち上げられた被災地支援関係のボランティア。いずれも、デザインやアートの力を生かした、女子美生らしい、優しさにあふれた取り組みです。それらプロジェクトの一部を紹介します。

女

子美と丹後織物工業組合とのコラボレーションによって実現した被災地支援プロジェクト「丹後ちりめんのデザイン風呂敷」。風呂敷は、ものを持ち運びに使用されるのももちろん、敷物にもなれば、マフラー代わりにもなる、被災地への贈りものにはぴったりの日用品です。しかも、たまたま楽に持ち運べる上に、丹後ちりめんなら強度も抜群。これをキャンパスに腕を奮ったのは、3学科から集まった有志の学生75名です。

なかでも短大創造デザインテキストの2年生・専攻科生が手がけたアートワークは、花言葉に「希望」を持つガーベラ、そして全参加学生で復興への祈りを込めて描いた折鶴で、いずれも被災者の方々に元氣と希望、癒しを与えるべく、シルクスクリーン捺染で一枚一枚丁寧に染められました。工房で汗を流す学生たちは、目を輝か

せながら「特技を生かして復興に貢献したい」「自分でできることで喜んでもらいたい」と、はじめてのボランティアにも自然体。そこに気負いはありません。こうして3学科から用意された風呂敷の寄贈先は岩手県宮古市田老地区に決定。すでに100枚を寄贈し、さらに200〜300枚を鋭意制作中です。



Photo MIHO Text 立古和智



運動と創作を通じて被災者のストレスを発散

福島県南相馬市から東京都杉並区や群馬県吾妻郡に避難している人々を対象に、手や身体を無理なく動かしながら楽しく創作する催しを開催。本学からは学生32名、教職員10名が参加し、ステレン版画、フェイスペイントなどのほか縄跳びやジョギングなどを通じて、楽しい時間をともに過ごしました。



障がい者支援活動のシンボルマークをデザイン

本学で「ボランティア論」を担当する村一浩講師の呼びかけにより、デザイン学科4年 山本紗矢香さんが、福島県南相馬市の障がい者を支援する活動「杉並プロジェクト一届けよう、繋げよう、杉並から南相馬へ」のシンボルマークをデザイン。スタッフTシャツ、缶バッジ、ホームページの制作にも協力しました。

暖かな気持ちを、バラ色の軍手と防水バックで

ファッション造形学科の3・4年生が、バラの染料で1枚1枚美しく染め上げた軍手と、防水バッグを制作。ほんのりバラの香りがする暖かな軍手と、床においても汚れず、冷たいものを運ぶのに重宝する防水バッグは、岩手県宮古市田老地区と福島県南相馬市に贈られました。

アートによる子どもの支援を授業からスタート

メディアアート学科3年生が取り組む授業「プロジェクト&コラボレーション実習」から、被災した子どもたちの心的ストレスをアートとデザインで緩和するプロジェクトを開始。関東、仙台、石巻それぞれの会場でアニメーション制作のワークショップを開催しました。



ほかにも芸術学部が中心となり、長期的にボランティアを続けるための団体が設立されたほか、ファッション造形学科の学生、洋画専攻の教員と学生によるチャリティ展の開催、ヒーリング表現領域の学生によるチャリティ・ポストカードプロジェクトが、震災後に立ち上げられました。



社会が押しつけるルールや慣習を盲信せず、内に潜む「やりたい」に忠実であり続けてきた鴻池朋子さんを迎えてのトークイベント。「美術か否かはどうだっていい」「作品コンセプトは二の次」など、ドキッとする言葉に彩られた当日の様子をお伝えする。

「文」立古和智

6 月17日に開催されたトークイベント「鴻池朋子VS女子美女

子美生のあらゆる疑問に鴻池朋子さんが全力で答える―百問百問 学生よ、津波の中に立て!」。イベントを主催したJIPのもとへ、事前に寄せられた鴻池さんへの質問は100点以上。それらを元に掲出されたテーマは「アーティストとして生きる」こと。ストレートに質問をぶつけていく3時間半一本勝負は、鴻池さんの大学時代のエピソードに幕を開けた。

のっけから「大学はつまらなかった」とカウンターを浴びせられた学生たち。曰く「外の世界は音楽やファッションなど変化がめまぐるしく進む中で、大学は今生きて動いている社会から隔離された温室のような世界に映った」と鴻池さん。ほかに、形骸化した大学の

課題に疑問をもたずひたすらこなすことへの違和感、習うことで美術が習得できるという安易な教育への疑問など、身体が拒絶するものには当時からノーを貫いてきたと語る。

一方では「アーティストになろうという考えは皆無だった」という意外な一面も。「私は常にのめり込みたいたいことに素直なだけ。美術が美術ではないかと、いった線引きには興味がない」と、その発言は歯切れ良い。多くの作家が必要性を訴える「作品コンセプト」にも「もの作りの根拠って理由とか言葉ではない」ときっぱり。「作ったときには理由はわからずとも、長い時間を経てコンセプトという言語に辿り着くことだって多い」と、淡々と等身大の自分をさらけ出す。ほかにも「みんな自分の欲望に気づいていない」「人のやり方に倣うの

は安易」「リスクの大きいものほど面白い」など、息つく暇もなく繰り出される刺激的な言葉の数々は、気持ち良くこそあれ嫌みはない。だからこそ学生たちも、話にグイグイ引き込まれていく。つまるところ鴻池さんからのメッセージは、次の一言に集約される。

「今ならアーティストという職業で描けばお金をもらえるけれど、私の意識は、かつて洞窟の中で絵を描いていた人たちと変わらない」
創作はあくまで本能的な行為。「何かのために」が先立つものではない。素直な目でものごとと向き合い、自らに渦巻く欲望に忠実であり続けた結果として今があるわけだ。

JIP(女子美院生プロジェクト)
大学院修士課程洋画研究領域
2年生の有志学生で結成された
団体。女子美にアーティスト
を招き、講演会を開催する活動
を行っている。

鴻池朋子

東京芸術大学日本画専攻を1985年に卒業。以後、玩具、雑貨の企画デザインに長年従事。1997年より美術作品を発表。絵画、彫刻、アニメーション、絵本、ゲームなどを駆使し、現代の神話を壮大なインスタレーションで構築。スケールの大きな表現、高い技術力で国内外から高く評価されている。



萩尾望都客員教授 特別講義レポート

6月15日、メディア表現領域客員教授の萩尾望都先生が杉並キャンパスに來校され、特別講義をしてくださいました。萩尾先生は幼少の頃から絵を描くことが好きで、幼稚園・小学校の頃から漫画を描いていらしたと、高校生の時に手塚治虫先生の『新選組』という作品を読んだことで漫画家になろうと決心されたことや、デビュー前に東京の出版社に投稿を続けていらしたこと、作品に出てくる登場人物の名前の付け方など盛り

沢山に色々なお話しを聞かせていただきました。萩尾先生の代表作の一つ『11人いる!』が誕生した背景には宮沢賢治の童話『ざしき童子(ぼっこ)のはなし』がヒントになっていることや、『ポーの一族』を制作された時に参考にされたエドゥアルト・フックスの書籍『風俗の歴史』の話、『トーマの心臓』を制作中に編集部で起きた驚くべき出来ごとなど、次々と語られる萩尾先生の魅力的でエネルギーに溢れるお話しで教室は熱気でいっぱいとなりました。講義の最後には学生からの質問に熱心に答えていただき、大盛況のうちに講義が終了しました。



『11人いる!』『トーマの心臓』『ポーの一族』©萩尾望都/小学館文庫

萩尾望都
福岡県大牟田市出身。日本SFクラブ、日本漫画家協会に所属。主な作品『ポーの一族』SF作品『11人いる!』『トーマの心臓』『半神』『イグアナの娘』『マージナル』『メッシュ』など。2010年アメリカでインクポット賞、2011年日本漫画家協会賞、第40回 文部科学大臣賞など数多く受賞。

東京理科大学と 連携協力に関する 協定を締結

このたび本学は、東京理科大学と教育・研究活動全般における連携協力に関する協定を締結しました。6月9日には東京理科大学にて両大学の学長・理事長の出席のもとで協定の調印式を行いました。本学の太田智理理事長は、「美術は脳を洗浄してくれる。そこから新しい発想が生まれ、また心に勇気もくれるのである。科学の分野にも美術が必ず貢献できる」と語り、両大学が教育・研究において補完し合い、サイエンスの知識とアートの知識の融合によって学術の発展と有為な人材の育成を目指していくことを確認しました。



絵画寄贈に対する感謝状

学生制作の ヒーリングアートを寄贈

本協定の調印式にあわせ、学生が制作したヒーリングアートの東京理科大学への寄贈式も行いました。これは、学への寄贈式も行いました。これは、母校に絵を寄贈したいという想いをもった東京理科大学の化学科卒業生団体(昭和36K同期会)より同大の卒業生である本学理事長に相談があったことをきっかけに実現したヒーリングアートの共同プロジェクトによるものです。両大学の学生が共同して設置場所の選定や表現についての企画・検討を行い、その後本学の学生が制作を担当しました。完成した作品は東京理科大学神楽坂キャンパス5号館の理学部学舎の吹き抜けの大壁面に設置されています。

「なんでも
創るんがアートやろ」
ヤノベケンジ氏、語る

今年度第一弾となるキャリア支援センター主催のクリエイターズBOXが、4月27日に相模原キャンパスにて開催されました。第11回目を迎えた回の講演者は、国内外で大規模な個展を行い、そのスケールの大きさと観る者を魅了し続ける現代美術作家、ヤノベケンジさんでした。

ひょうひょうとした語り口で、京都市立芸術大学への進学を決意した理由は「仮面ライダーが好きで好きで、だからなんとか特撮もんを再現してみたくて」だったと話し、会場内に笑いを誘ったヤノベさん。作品の解説・紹介の他、創作活動の原点であり少年時代の象徴でもある『大阪万博EXPO'70』

や「太陽の塔」について、はたまた美大進学を終始反対していた父と腹話術用人形「トラヤン」を通して創りあげることとなった思いもよらぬコラボレーションの裏話など、ヤノベさんならではの会話はおいにわきました。かねてよりチェルノブイリ原発や、第五福竜丸への思いを込めた作品を発表し続けているヤノベさんに、3月に発生した福島原発の事故を受けて「なにか制作活動をする予定はあるのでしょうか？」と、学生が質問。ヤノベさんはゆっくりと、けれども力強く「表現者は自分の作品にメッセージを託して発信できる。だからこそ福島への思いを表現したい。秋には、渋谷の岡本太郎記念館で開催する展覧会に福島原発に関連した作品を出品する予定です。ぜひ観に来てください」と答え、その回答に多くの出席者が目を輝かせていました。

ヤノベケンジ
1965年大阪府生まれ。1991年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。国内外において、大型機械彫刻作品を精力的に発表し、2003年には集大成的展覧会「メガロマニア」(国立国際美術館)を開催。現在は京都造形大学で教鞭をとりながら、創作活動を展開している。
<http://www.yanobe.com/>



「トラヤン」2004年 撮影 豊永政史

名久井直子氏、
ブックデザインへの
熱い想いを語る

4月に開催されたものに続き第12回目のクリエイターズBOXが、7月13日に相模原キャンパスにて開催されました。今回の講演者は江國香織さんや恩田陸さんなどの文芸作品を始め、酒井駒子さんの2011年カレンダーなどのデザインを手がけている人気ブックデザイナーの名久井直子さんでした。

を挙げ、それを通して「情報を視覚化すること」や「情報を整理し順番と階層をつけること」を学んだことが、現在のブックデザインの仕事に生かされているとお話してくださいました。「最後は自分の知識が助けてくれるので、どんな経験も無駄にはならないと思います」という言葉にみな大きく頷いていました。年間100冊ものブックデザインを手がける名久井さんに「仕事をし続けるコツはなんですか」と学生が質問。うーん、と考えながら「前向きにコツコツするだけですね。うっかり反省し始めると落ち込んでしまうので(笑)。過去ではなく今、目の前にあることに向き合うことがコツといえればコツなのかも？」と回答。講演終了後には「すべてが説得力のあるお話ばかりで、これから本を見る目が変わりそうです」と話す学生もおり、大変充実した講演会となりました。



左より『エルニーニョ』中島京子/講談社/2010『立原道造詩集 僕らはひとりて夜がひろがる』立原道造 魚喃キリコ/PARCO 出版/2010『ホソミチくん』荒井良二/イーストプレス/2011

名久井直子
1976年岩手県生まれ。1998年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。外資系広告代理店にアートディレクターとして勤務した後、2005年に装幀家として独立。著述関係者、読者からも「名久井の装幀」は人気があり、年間にデザインを手がける本は100冊を超える。



03 |

佐藤和子客員教授 特別授業レポート

6月16日、「プロダクトデザイン概論」内で、本学卒業生のデザイナーでありジャーナリストの佐藤和子客員教授をゲスト講師にお迎えし、「倉俣史朗とソットサスとイタリアデザイン」をテーマに、佐藤先生のイタリア留学のエピソード、イタリアデザインの歴史からイタリアでの佐藤先生のお仕事のご紹介、倉俣史朗氏とエットレ・ソットサス氏のデザインについて特別授業が行われました。生前の両氏と深い交流があった佐藤先生は、21_21 DESIGN SIGHT

で行われた「倉俣史朗とエットレ・ソットサス展」で、ソットサス夫人とオープニングトークをされるほどで、両氏をよく知る佐藤先生だからこそお話いただける講義内容に、聴講者は大きな関心を寄せました。舟橋桃代さん(プロダクトデザイン専攻2年)は、「佐藤先生の体験談を交えたお話は非常に興味深く、今後、私たちが新しいデザインを生み出していく上で、過去のデザインやその変革を知ることがとても重要だと実感する機会になった。」と感想を語りました。

04 |

卒業生 松本博子氏特別講演会 レポート



7月6日、株式会社東芝デザインセンターにていくつかのプロジェクトリーダーとしてもご活躍中の松本博子氏(株東芝デザインセンター 家庭電器デザイン担当 参事/本学卒業生/本学非常勤講師)が「就活に役立てよう『自分らしさの出し方』」をテーマに就職活動に役立つお話、これまで手がけられた商品や仕事に対する考えをお話いただきました。就職活動についてはまず会社を知ること、ポートフォリオは自分らしく、自分らしさの出し方、プレゼンは礼儀

正しく謙虚に、熱心に等、卒業生としてのアドバイスや企業の視点から見たポイントを紹介。「周囲の人に引っ張られないよう自分を持つことが大切。心にゆとりを持ちましょう」と学生へメッセージを送りました。製品を作る上で「生活者視点を常に持ち続けること」を心がけているという松本氏。製品が完成するまでのお話からは、仕事に対するこだわりや情熱が感じられました。女子美生への温かなメッセージは、学生にとってとても良い刺激となりました。



01 |

大村智理事長が 「瑞宝重光章」を受章

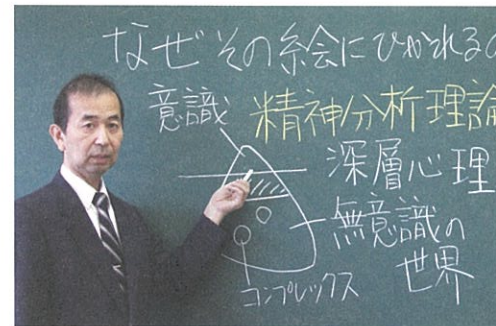
本学 大村智理事長が、長年の功績が認められ「瑞宝重光章」を受章しました。

【プロフィール】

日本学士院、全米科学アカデミー等国内外7つの科学アカデミー会員/東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了/東京大学薬学博士、東京理科大学理学博士/米国微生物学会賞、日本学士院賞、藤原賞、独国ロベルト・コッホ金牌等、国内外の数多くの賞を受賞

【研究業績】

微生物の生産する440種を超える新規化合物を発見。発見した化合物の内、25種が医薬、動物薬、研究用試薬等として世界中で使われている。中でも米メルク社と共同開発した抗寄生虫抗生物質イベルメクチンは、現在WHOの指導の下、重篤な熱帯病のオンコセルカ症(河川盲目症)とリンパ系フィラリア症を撲滅するために中南米・アフリカで年間約2億人に投与され、威力を発揮。人類の健康と福祉の向上に国際的に多大な貢献をしている。



02 | 芸術学部 美術学科 “美術教育専攻”を新設

2012年4月より、芸術学部美術学科に教員養成のための美術教育専攻を新設します。大学創立当初より建学の精神のひとつに掲げてきた「美術教師の養成」を体現する新専攻です。主任教授には前田基成教授が就任。美術大学で学ぶ利点を生かし、実技指導力の高い教員の養成を目指します。また、基礎的な美術理論や美術史のほか、心理学に基づく実践的な美術教育理論を学ぶことができます。

NEWS & TOPICS

12

横浜市 扇町公園 リニューアル提案 プロジェクト



2010年度より環境デザイン専攻の飯村和道教授指導のもと同専攻の4年生と大学院生の選抜メンバーによって「扇町公園リニューアル提案」を行ってきました。これは、現在、同市中区の扇町公園が抱える問題を改善し、新しい公園への提案を行うものです。6月に基本設計が完了。2012年度には竣工予定です。

11

工芸専攻卒業生 肥田真理子氏 講演会開催



7月1日、工芸専攻卒業生で、現在、インテリアテキスタイルデザイナー・プランナーとして国内外で活躍中の肥田真理子さんの講演会が行われました。女子美在学中のエピソードや就職活動、これまでのお仕事についてお話いただき、社会の厳しさや仕事の楽しさを知る貴重な講演会となりました。

14

ヒーリング・ アート プロジェクト展示



7月13日～15日、東京ビッグサイトで行われた「国際モダンホスピタルショー2011」で、本学が長年にわたって手がけている、心の癒し効果を考えて環境をつくるヒーリング・アートプロジェクトを「ヒーリング・アートの医療空間における活用」というテーマで常設展示しました。

13

注染 「b・tanぬぐい」 イベント開催



注染「b・tanぬぐい」プロジェクトが吉祥寺の日本茶専門店「おちゃらか」で6月5日にイベントを行いました。製品化された自作品の社会性を直接学ぶことを目的にプロジェクト卒業生2名と在学生2名が店舗と協力して開催しました。「b・tanぬぐい」の手拭は店に常設され、イベントは今後も続く予定です。

16

花と緑の祭典で デザイン花壇を 公開



相模原市が花と緑の祭典「第28回 全国都市緑化ごしまフェア」にデザイン花壇を出展するのに伴い、学内でデザインコンペティションが開催されました。最優秀賞を受賞した柴谷祐衣さん(環境デザイン専攻3年)のデザイン花壇が、3月18日～5月22日、鹿児島県でのイベント会場で公開されました。

15

相模原市 オリジナル封筒を デザイン



相模原市シティセールス課より、市の広報物を送るオリジナル封筒の作成依頼を受け、ヴィジュアルデザイン専攻の井上悦治教授監修のもと、在学生・卒業生の作品の中から、「楽しく力強いデザインになるよう考えた」という大森千紗登さん(2004年デザイン科卒業)の作品が採用されました。

18

公募展受賞者紹介

ARTE & ARTE "Energhia -2011 Miniartextil como" 入選
高田 文(大学院 修士課程 立体芸術研究領域2年)

第61回埼玉県美術展覧会 埼玉県議会議長賞
渡部 友美絵(立体アート学科3年)

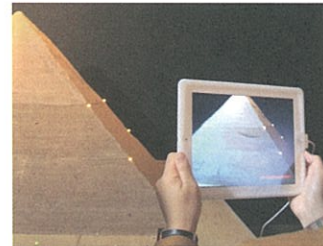
第8回全日本年賀状大賞コンクール版画部門 日本郵便賞
岡田 有紀子(洋画専攻4年)

17

注染 「b・tanぬぐい」が NHKテキストに



7月21日発売のNHK教育TV「すてきにハンドメイド」8月号テキストの特集として、8ページにわたって、注染「b・tanぬぐい」プロジェクトが紹介されました。学生をモデルに撮影は大学構内で行われ、「b・tanぬぐい」を使った数点の作品の作り方も初公開。テキストは全国の書店で販売中です。



©2011 女子美術大学・大日本印刷株式会社

07

「吉村作治の 古代七つの文明展」で 展示協力

6月18日から福岡市博物館で開催された「吉村作治の古代七つの文明展～人と地球と太陽の船～」にて、内山博子教授率いる女子美術大学と大日本印刷株式会社の共同プロジェクトチームがARシステムを用いて古代エジプトを体験できるコンテンツを展示しました。最新テクノロジーで古代エジプト蘇らせるというチャレンジに注目が集まりました。
<巡回展案内> 9月11日～11月13日 愛媛県美術館

06

“女子美よさこい”が 学内初お目見え！

昨夏、本場高知の「よさこい祭」に出場し「個性的」と評価された“女子美よさこい”チーム。今年の踊り初めは7月16日、JAMで開催された「祭magic展」のトークショー。当日はチームの一員たる教員、同窓生、学生らで「祭」を熱く語り、最後は一般参加者と一緒に、皆で“女子美よさこい”を。鳴子が響く会場には笑顔があふれました。
(詳細 <http://joshibiyosakoi.seesaa.net/>)

05

アート&デザイン ファシリテーター、 誕生！

本学ではアートとデザインの表現活動を通して人と人を繋ぎ、問題点を整理し解決の合意形成を促し実践する人材、「アート&デザイン ファシリテーター」の養成プログラムを2008年度に開設しました。7月13日にプログラムを修了した第一期生10名に、横山勝樹学長から修了書が授与されました。

10

福士朋子准教授 SICF12で グランプリ受賞



「内は外」(2010)

美術学科洋画専攻の福士朋子准教授(絵画科洋画専攻卒業)が、複合文化施設「スパイラル」が企画運営するSICF12にて、グランプリを受賞しました。10月にはグランプリアーティスト福士朋子展が行われます。
SICF12
グランプリアーティスト 福士朋子展
会期:10月28日(金)～30日(日)
場所:スパイラル1F ショウケース

09

高円寺のイベントで 学生が フェイスペイント



5月1日、杉並区高円寺で行われたパフォーマンスイベント「高円寺びっくり大道芸2011」で、有志学生と佐藤真澄准教授(短大デザインコース)がフェイスペイントを行いました。今年のイベントでは震災の影響を受けてチャリティをすることとなり、フェイスペイントコーナーでも募金を呼びかけ、集まった14,742円が福島県南相馬市へ寄付されました。

08

卒業生デザインの キャラクターが デビュー



サンエックス(株)から、卒業生 横田智里さん(2008年 デザイン学科卒業)が手がけた「ピギーガール」がデビューしました。
横田さんからのコメント
ピギーガールとは、毎日かわいくするために全力でがんばっているこぶたの女の子です。自分のキャラクターがデビューするという小さな頃からの夢が実現したわけですが、夢の先にはまだまだやりたい事が増えていくばかりです。ピギーと共に、大勢の方々にお世話になりながら努力を続けていきたいと思っています。

同窓会企画展 予期せざる出発

5/21(土) ⇨ 6/19(日)

女子美術大学同窓会は、本学創立110周年を記念し、卒業生と在学生を対象とした公募展を開催しました。これは、有楽町朝日ギャラリーで開催された展覧会の巡回展であり、本展では入賞作品を含む入選作品37点すべてを展示しました。

JAM 展覧会予告

9/16(金) ⇨ 10/23(日)

平成23年度 退職教員記念展

大澤美樹子先生、恩田美千代先生(選定年により平成23年3月退職)、小山欽也先生、嶋澤道雄先生、長谷川好男先生、安田律子先生の作品をご紹介します。

10/27(木) ⇨ 10/31(月)

造形さがみ風っ子展

相模原市教育委員会主催による、小中学生の作品展です。

11/9(水) ⇨ 11/30(水)

江戸 KIMONO アート展

女子美術コレクションより日本人の「飾り」や「遊び」の精神、ファッションセンス、過去から現代、未来へと繋がる「江戸の美意識」と「KIMONOの魅力」をご紹介します。

12/9(金) ⇨ 2/5(日) ※12/27~1/10休館

input → output

溝田コレクション × 光島貴之

溝田コトエ名誉教授より寄贈されたコレクションを初公開。視覚にハンディのある作家・光島貴之と女子美生が対話を通してコレクションを鑑賞し、鑑賞をもとに作品の制作にも挑みます。

祭 magic 展

7/1(金) ⇨ 7/31(日)

芸術学科4年生の企画展。相模原市の「上溝夏祭り」を取り上げ、祭りに関わる人々へのインタビューの展示を中心に、祭りの魅力に迫りました。林正寛教授と女子美よさこい同好会によるトークショーも行われました。

銀座 gallery 女子美 展覧会報告

野村千夏 木版画展「-a-と-b-」

4/4(月) → 4/16(土)

第3回女子美バリエーション賞受賞・野村千夏(大学・版画コース卒業)による個展。水性木版による新作を発表。

第1回『新しい眼』 斉藤慶子展

4/18(月) → 4/23(土)

女子美を卒業・修了した期待の新人作家を紹介する企画『新しい眼』。大学院版画領域修了 斉藤慶子の水性木版を展示。

内山良子 × 片平菜摘子「木と、水と、和紙と」

4/25(月) → 5/7(土)

大学院版画領域を修了した内山良子と片平菜摘子による2人展。水性木版の作品を展示。

松下サトル展

5/9(月) → 5/21(土)

非常勤講師、日本版画協会会員、松下サトルによる個展。水性木版、木彫を展示。

木村みな「マイオリル」

5/23(月) → 6/4(土)

創画会会友の木村みな(大学院・日本画修了)による個展。

萩原綾乃展

6/6(月) → 6/18(土)

洋画研究室助手・萩原綾乃(大学院・洋画修了)による個展。油彩、映像・写真、ドローイングを展示。

角谷沙奈美展

6/20(月) → 7/2(土)

洋画研究室助手・角谷沙奈美(大学院・洋画修了)による個展。油彩作品を展示。



JAM 展覧会報告①

4/22(金) ⇨ 5/15(日)

本展覧会では、高さ3メートル強に及ぶ法隆寺金堂壁画「コロッタイプ版原寸大複製」12幅(女子美術大学美術館所蔵)を一室に展示しました。これらは、文部省(当時)の依頼により、京都便利堂が撮影し、昭和12年(1937年)にコロッタイプ版原寸大複製として作成され、戦前・戦後の模写事業の際に模写に従事した画家たちの下図等として活用されました。本展では、併せて明治時代の安田鞆彦、戦前・戦後の模写事業に従事した橋本明治、吉岡堅二らの模写作品を紹介しました。会期中に開催したフォーラムでは、永井信一名誉教授、松本俊喬名誉教授による講演や山本修氏(便利堂コロッタイプ工房)によるワークショップが好評を得ました。また、稲木吉一教授によるギャラリートークには、多くの方にご参加いただきました。展示・イベントを通じて、金堂壁画の魅力や文化財保存に対する人々の情熱を紹介することができました。

法隆寺金堂壁画をうつす
コロッタイプと画家による
模写制作展



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8

企画・編集 総務企画部広報課
監修 山本吉男・林規章
企画・デザイン 株式会社 Kitchen Sink.
制作・印刷 株式会社 日相印刷
発行日 2011年9月9日

広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報課までご連絡ください。

広報課 | TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL <http://www.joshibi.ac.jp>